

現代心理臨床における「うつろい」に関する研究
-北山理論からの展開-

森 一也

2024 年度

【論文要約】

本論文では、心理療法において生ずる心的変化について、「うつろい」という概念に着目し、研究を行った。大きな物語が失われたポストモダンの現代において、人間の成長、変化、教育を捉える価値観は多様なものへと変化している。「あるべき人生」というヴィジョンが失われる中、現代社会においては効率性が重んじられ、捗々しい成果こそが強調される。これらは、日本において、1998 年以降、うつ病による自殺者数が増加し、その後、高止まりしていることとも無縁でない。鷺田 (2003) は、そのような、現代の成果主義的な現代のあり様に、西洋近代が本質的に抱える前のめり「pro-」の姿勢、前望的 pro-spective な時間意識を見た。そこでは、「捗る (はかどる)」ことにこそ重きがおかれ、計数可能で、目に見えてわかる変化が取り沙汰されやすい。反対に、「はかない (捗ない)」もの、ここで「はか」の本来の語源に拠るなら、「はか」がない、つまり、努めても努めてもその結果が手に入れない、「あっけない」、「むなしい」という意味内容と体験は軽視されがちである (竹内, 2007)。

本来的に、心理療法、とりわけ力動学派は、そういった社会で取捨されがちな、断念や諦め、時に抑うつを伴う、人格の変容を一つの相として重視してきた。Bohm(1992)が指摘するように、心理療法において人は「内的生活を持つという感覚 the feeling of having an inner life」を体験する。そのような体験は、現実生活とは異なる時間軸で生じ、その機微を捉える視点や感性が心理臨床家には求められるのだが、とりわけ近年の心理臨床においては、効果研究によってその変化を捉え得るか否かという次元の議論が盛んであった (Cooper, 2012)。そこで、本研究では、より心の深層に生ずる変化の相に焦点を当てた探求を行うこととし、その枠組みとして、「うつろい transience」に着目した。「うつろい」自体は哲学、自然科学、文学において論ぜられる幅広い概念だが (Phillips, 2008)、それを臨床概念として用いたのは北山修(1998, 2023)である。北山は、精神分析の立場から、『古事記』や民話、浮世絵の母子像、春画に描かれた二者あるいは三者の光景に目を向け、日本人の<きずな>や<つながり>の発生について探求してきた。北山のまなざしは、常に、人と人との間や背景、そこに読み取られる人と人のつながりに向けられる。<つながり>が断ち切られる、つまり、対象との「関係」において、自己がいかに変化していくか、さらには、日本文化が持つ<あわい>とも重なる、中間的な体験が重視される。

本研究では、「うつろい(transience)」を、北山 (1998) に立脚し、また、黒川(2004)、岩崎 (2016) らの移行現象研究を参考に、「浮かんで消えゆく、つまり、はかない対象を通して得られる、過渡性を帯びた体験の相」と定義し、論を進める。

次に、本研究において「うつろい」を取り上げる必要性と意義を述べる。Lyotard, J(1986)が指摘したようにポストモダンの現代は、無数の小さな物語から成る時代である。1990 年代以降、グローバル化や情報ネットワーク化の急速な進行、また、消費社会的傾向の一層の高度化に伴い、集団や行動様式の持続性・安定性は徐々に失われ、社会の流動性は急速に上昇した。社会学者の Bauman(2001)は、そのような現代を「流動化する現代 Liquid

modern」と名づけた。増大していく他者の不透明性から自己の相対化も困難となり、浮動の自己のあり方が肯定される風潮の中で、自己体験の輪郭はより不鮮明となる。つまり、流動する社会環境の中で、個人の内に生ずる小さな物語-「うつろい」の体験に目をやること、それ自体が難しい状況があるように思うのである。

また、ユング派の河合(2020)は、「解離」、「発達障害」といった現代の精神病理を論ずる中で、その背後に生ずる「大きな連関の喪失」を見出した。現代において、人間関係を中心とした＜つながり＞が難しくなっているのは、この世とあの世、現実と超越などの大きな意味の連関が失われたからであるとする。SNSの普及、IT機器の発達など情報伝達手段のデジタル化が進み、心に浮かんだことをすぐネット上で発信できてしまう現代では、意識の表層と深層、内と外の区別も容易に失われてしまう。成田(2010)は、現代の青年病理の特徴に「精神内界の葛藤から外界の行動上の問題へ」、「深層と表層の区別の喪失と、深層と表層の羅列的・並列的表現」、「人格の統合努力からその放棄へ」という点を挙げている。このように＜あいだ＞が失われやすい現代であるからこそ、そこに生ずる＜うつろい＞という体験を再照射することで、心の変化に対する新たな視座を得られるのではないかと考える。

本研究の根源的な問いは、「人と人、物事と物事の＜あいだ＞が失われつつある現代において、効率主義・成果主義によらない『うつろい』という中間的な体験の相は重要な意義を持つのではないか。また、『うつろい』を心理臨床に活かすための具体的な方法論とはどのようなものか」である。以上の問いに基づき、本稿では次のような構成で研究を進めた。

第1部「研究の基盤」では文献研究を行い、「うつろい」概念の再定義と明確化、現代の心理臨床における位置づけとその意義を探索的に検討した。まず、第1章第1節において、本研究のベースとなる北山修による「うつろい」理論の展望を行った。北山は、「Transience: Its beauty and Danger」(1998)において、「うつろい」を、災害や取り返しのつかない出来事に対する一過的で正常な反応として記述している。その後、「うつろい」は、北山の各理論と関連して論じられ、「臨床言語論」、「見るなの禁止論」、「自虐的世話役論」、「ケガレの分析論」、「川の字文化論」の基調を成す概念として広く用いられてきたことが明らかになった。次に、第1章第3節において、北山自身の個人史についてまとめ、そのパーソナルな側面も踏まえ、「うつろい」概念の真髄に迫ることを試みた。北山自身が、精神科医、精神分析家であるとともに、マス・コミュニケーションでの活動を行うなど、その活動領域は多岐に渡る。個人史の整理により、異分野、異文化における経験、知見を束ね、理論化する過程に「うつろい」の姿勢が活かされていたことが明らかとなった。続く、第1章第4節『「うつろい」という視座からの北山理論の展望』において、「うつろい」という観点から、北山修による諸理論を年代順に紐解き、具体的な技法論を考察するとともに、北山理論の系統的な整理を試みた。

また、「うつろい」の語は、日常語としても広く用いられてきた。その後は、古来より「無常」、「はかなさ」という移ろい、変わりゆくものに対する感性・情緒を示す用語でもあった。そこで、第1章第2節では、日常語としての「うつろい」を、主に日本の古典文学を基にそ

の概念が持つ歴史、定義の変遷を考察した。日本古来の古典を紐解き見えてきたのは、「うつろい」が古来より日本の詩歌において多く歌われ、その歴史とともに意味を変化させてきたことである。元来、その語は自然や風景が示す微妙な変化を示すものとして用いられたが、王朝時代、激動ともいえる栄枯盛衰の中で、ニヒリズムとはまた異なる日本独特の「無常感」という感性とし発展したものである可能性が考えられた。同時に、その語源に「空」「無」の意を持つことが示され、「ある」と「ない」の相反を含みながら変化へと向かう複合的な心的状態を指す概念である可能性が示唆された。さらに、そして、第3節において、心理臨床学全般における「うつろい」概念の意義を研究した。「うつろい」を、筆者が立脚する精神分析学のみでなく、心理療法の各学派における心的変化や治癒機転の考え方と照合し、考察を加えることで、心理臨床全体における「うつろい」概念の位置づけと意義を考察した。

続く第2章では、「うつろい」概念について更に広い視野で検討を加えるために、異なる学派、文化の類似概念との比較研究を行った。第2章第1節では、Freud, S (1916) による「無常 Vergänglichkeit」論文を取り上げ、それと「うつろい」との比較を行った。「無常」論文には、Freud のメランコリー論に連なる思想が示されている。「無常」と「うつろい」の比較により、「うつろい」が対象喪失に関わる概念であること、そして「死すべき運命 mortality」という Freud の理論展開においては未発展であった領域も明らかとなった。「うつろい」は、融合的な自然観とも親和性が高い概念である可能性が考えられた。そして、第2章第2節では、インド文化・思想と、その中での「うつろい」の意義を論じた。Basak, J (2018) は「うつろい」をより広くアジアの公理と重ねて考察を加えている。インドで古来から伝わるウパニシャッド哲学では、「宇宙の根源」である梵（ブラフマン）と「人間の本質」であるアトマン（我）を仮定し、この両者が究極的に同一であると認識する「梵我一如」が輪廻の業から逃れる唯一の方法とされる（辛島, 2020）。仏教以前に遡っても、インドには輪廻転生の教えが広く流布されていた。インド思想が教えるのは、「うつろい」の体験の中で生ずる「生」と「死」のダイナミズムは、我々の日常において生ずる観念としての「死」を、また異なる形で捉え直す機会を与える。そこでは、「死」が切断するものであると同時に、次なる世代を意識させる、いわば「支えるもの」として存在し始めることが示唆された。明らかとなった。また、この点は、異なる側面で見れば、心理療法に内包される特定の時間体験のあり方を示すものと考えられた。日常の直線的時間では背景化される「死」は通常、見えないものとなる。しかし、精神療法、とりわけ円環的時間のリズムを重視する精神分析的な心理療法が開始すれば、「生」-「死」というベクトルが、意識において前傾化する。その中で、「うつろい」という円環的時間が動き出し、そこに、一つ生命、人生に止まらない大いなる自己の喪失と再生の物語が生起するものと考えられた。

第2章第3節では、「うつろい」における抑うつ体験の側面に焦点を当て、Klein, M による「抑うつポジション」との比較検討を行った。その結果、「うつろい」は、当初、Klein が概念化した「抑うつポジション」に比べ、進展と後退の揺れ動きを含む体験であることが

考察された。

以上、第1章の文献研究の結果から、本研究の独創的な視点として新たに次の点の精査、検討を進めることとした。第1が「うつろい」に着目した事例研究の蓄積である。第2に、母子関係の文脈を基盤にしながら、そこに生ずる第三者性をどのように理解するかを更に検討することである。第3に、抑うつや死の問題と関連し、日本文化に馴染みある抑うつ的心情の意義を探索することである。第4に東洋思想との関連を補足することである。

次に、第2部「研究の展開」において、「うつろい」の応用可能性について、これまでの筆者の自験例を取り上げ、多角的な視点から事例研究を行った。

第3章では、『うつろい』と関係性』として、精神病水準の混乱を呈した事例を挙げ、関係性の中に生ずる「うつろい」を記述した。精神病圏のクライエントのコミュニケーションにおいては、投影同一化が優勢であり、その表現媒体は行動が主となる。それゆえ、内省的なフェイズが訪れるまで、その投影同一化をいかに受け止め、逆転移とともに理解として保持するかが非常に重要になる。また、関係性に現れる「分裂」を治療者がどのように理解し、取り扱うかが、「うつろい」の発生と維持において重要であることを述べた。

続く、第4章では、『うつろい』と時間』として、時間性との関連を論ずる。「うつろい」という体験は、日本の四季に現れるように円環的な時間感覚を表している。それはつまり、自然の成り行きに任せるといものである。しかし、ある病態のクライエントの中には反復強迫により、ある時間に囚われ、無時間性へと固着していることも少なくない。Kernberg, O(2008)が論ずるように、主観的時間のあり方は、自己愛やトラウマの病理とも密接に関わる。そこで、本章では、外傷的体験から行動化を呈していた事例において、「うつろい」の時間がいかに生じたかを記述し、時間との関連で考察を加えた。

第5章では、『うつろい』と空間』として、空間性との関連を論じた。空間性に関わる精神分析の概念が、Winnicott, D. W., Ogden, T.によって論じられた「可能性空間 Potential space」の理論である。本章では、衝動性の亢進から通常的精神分析的な心理療法の構造維持が困難であった男児との治療を提示し、空間性という観点から「うつろい」の生起を記述した。

第6章では、『うつろい』と家族』として、「川の字文化論」との関連から、「うつろい」の持つ多層性を論じた。「うつろい」は早期母子関係という、母子の二項関係に基づきながら、三項関係へと繋ぐ体験であると考えられた。その十分な発露のためには、父―母―子という三者一体の早期発達環境が、原光景との関連から見た時に病理性だけでなく、一体感・連帯感の醸成を促すものとして理解される必要があることを論じた。

そして、第7章では、『うつろい』と自然』として、震災後トラウマの事例から「うつろい」と自然観の関連を論じた。

最終章である、「第3部-総合考察-」においては、「うつろい」研究全体を通して得られた知見として以下の点を論じた。第1に「うつろい」概念から北山理論を系統的に整理する中で、その理論の発展的展開として、①視覚領域の持つ可能性を広げること、②曖昧さ、中間領域の持つ意義再考、③東洋思想との更なる関連、という3つの方向性について筆者の見解

を論じた。そして、本論文の根源的な問いである「人と人、物事と物事の＜あいだ＞が失われつつある現代において、効率主義・成果主義によらない『うつろい』という中間的な体験の相は重要な意義を持つのでないか。また、その具体的な方法論はどのようなものか」については、①「うつろい」が照射する、現代社会の「関係性」のあり方、②緩徐な心の変化に目を向ける視座の強調-「分裂」を生きる/活かすこと、③心理療法を行う際の時間性に関する新たなモデル、④日本文化に馴染みやすい抑うつ的情緒とその取り扱いへの提案-「空ろ」を抱えること-、という観点からその現代社会における意義と若干の技法的な工夫を論じた。最後に、本研究の今後の課題として、①「うつろい」概念の精練、②異なる属性、病態を持つ事例を対象とした検証、③文化的側面の考察の3点が挙げられた。